

源氏物語と明石 ～架空の人物 明石の君 明石入道～

『明石市史』(昭和 35 年 3 月発行)には、「源氏物語の明石」について次のような記載があります。

光源氏を主人公とする世界最古の浪漫文学が「源氏物語」である。筆者紫式部は十九才のとき、越前の国守となって下向した父為時にしたがって雪の北国へいって一年ばかり滞在したが、山陽方面一明石附近まで果たして来たかどうか解らない。友人と但馬の温泉に行く途中、二見に泊って歌を残した藤原兼輔は、紫式部の曾祖父であったが、虚構性の多い小説のことであるから、ひとの談話からヒントをえたことも多かっただろう。「源氏物語」における明石は、どう描かれているであろう。「竹取物語」では明石は僻地として扱われ、わずかに地名が一回あらわれるにすぎないが、「源氏物語」の明石の巻では、ここが舞台として取りあげられている。

明石の浦は、これといってひどく勝れた場所とて無いが、ただ海上の景色が、よそとは違ってこじんまりとまとまり、ゆったりとして穏やかな所である。ただ目の前に見られるのは、淡路島で、秋はいつも浜風がひどく、身にしみるくらいに吹くのであった。(明石川河口付近から淡路島を臨む)

光源氏が浜辺の館から明石の上の住む岡辺の館にゆく途中は、四方の浦々が見わたされる。須磨ではあまり淋しくて海人の住まいもすくなかったが、明石の浜には人が多いので絶え間なく降り続いた雨が止むと、海では漁師たちが威勢よく働いている。



(明石川河口付近から淡路島を臨む)

○「浜辺の館」と「岡辺の館」を訪ねて

「源氏物語」では、官職を奪われ須磨に住んでいた主人公の光源氏を、明石入道が明石川河口付近の自邸「浜辺の館」に招きいれました。入道の邸宅は明石市大観町の善楽寺付近。光源氏屋敷は、善楽寺のすぐ西の無量光寺と言われています。光源氏は、ここから明石入道の娘が住む「岡辺の館」(別荘)まで、明石川、その支流の櫛谷(はせたに)川を5～6キロ遡り、会いに行ったことになっています。明石川河口の●が「浜辺の館」、上流の■が「岡辺の館」(神戸市西区櫛谷町松本)とされています。

明石入道も、明石の君(上)も架空の人物であるので、邸宅も別荘も実在しないと考えられますが、江戸時代前期、文人として知られた明石藩 5 代藩主、松平忠国(在職 1649～59)が創作したともいわれています。

櫛谷川の畔の「岡辺の館」跡には、松平忠国の歌「月影の 光る君住む 跡とへば 星の屋敷に 志げる蓬生」が刻まれた碑があります。



また、「浜辺の館」跡(善楽寺)には、同じく松平忠国の歌「いにしへの名のみ残りて 有明のあかしの上の 親住みしあと」の刻まれた碑があります。

いずれも文字は風化しており、近くの新しい石に歌が刻まれています。(参照『今はむかし、伝説紀行』日新信用金庫)

○明石の君 (「BanCul 播磨事典」より)

紫式部『源氏物語』に登場する架空の人物。光源氏が愛した女性の一人。明石の上とも呼ばれる。都から退き須磨に佐び住まいをしていた光源氏は、娘を奉りたいという父明石の入道の願いを受け入れ明石に移り住み、しばしば手紙を送るものの、当の明石の君は釣り合わぬ身分と悟り心を開かない。ようやく契りを結ぶが、都の紫の上への想いから関係をはばかる源氏に、明石の君は悲しみを募らせる。やがて源氏が赦免され帰京。その後姫君が生まれたことを知った源氏に京へ呼び寄せられる。姫君は紫の上の養女に引き取られ、その後皇后となった。美しさと気品を備え、教養があり琴や琵琶をよくする。紫の上のライバル的存在として描かれる。

○関連する寺院等



光源氏が通ったという「蔦の細道」と源氏月見寺のあった月浦山無量光寺。境内に「源氏稲荷」がある。

明石入道「浜辺の館」跡の善楽寺の庭から無量光寺を臨む。